

平成 21 年 6 月 22 日現在

研究種目：特別研究員奨励費
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19・7804
 研究課題名（和文）日本列島の削りかけ状造形物をめぐる研究
 —形象としての削りかけに人々の精神性をよむ
 研究課題名（英文）A Study on *Kezurikake* in the Japanese Archipelago
 --- Reading of people's spirituality embodied in its shape
 研究代表者
 今石 みぎわ (IMAISHI MIGIWA)
 東北芸術工科大学・芸術工学研究科・特別研究員 (DC2)

研究成果の概要：

本研究では、削りかけと総称される木製祭具をめぐる具体的なモノや行為を検証することによって、そこに形象化された精神にアプローチすることを試みている。研究では、まず関連資料の網羅的収集を実施し、次いで収集資料の分析を行なった。分析においてはとくに削りかけ材となる樹木に焦点を当て、「祭りの木」に対する認識やその選定をめぐる人々の精神性—自然物をどのように認識し、特定の事物に聖性を付与するのか—を検証した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	0	500,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	0	1,000,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：

キーワード：削りかけ、イナウ、樹木文化、里山、人為的生態系、小正月

1. 研究開始当初の背景

本研究が対象とするのは「削りかけ」と総称される木製祭具である。削りかけは物質にすぎない。しかし同時に、人々の精神性が具体的な造形物として、行為として表現されたものでもある。本研究は削りかけという可視的、具体的で検証可能なモノの研究を通し、そこに結晶されている抽象的な精神文化の一端を明らかにしようとするものである。

そもそも削りかけ状の祭具は、日本では東北から南九州までの広い範囲で家や村の祭

事などに用いられてきたほか、アイヌなどの北方諸民族を始め、中国沿岸部、ラオス、マレーシア、ボルネオ諸島の諸民族など、東アジアの広い地域で祭具として使用されてきたことが報告されている。東アジアにおける精神文化の近接・連続関係や伝播の問題を考える上で、削りかけ状祭具の比較研究は今後大きな意義を持つものと思われるが、これまで日本列島の削りかけについての体系的な研究はほとんど為されてこなかった。それは第一に、列島の分布域全体を網羅するような事

例の収集、および整理・分析が行われていないことに問題があった。さらには、論証の前提となる具体的例証の乏しいままに、依り代や予祝行事の呪具などの民俗学的解釈が当てはめられることにより、議論は抽象的な次元に留まったまま、日本民俗学の枠組みの内に閉じられてきたのが現状であった。

2. 研究の目的

以上の状況を踏まえ、本研究では二つの目的を設定した。

(1) 日本列島（アイヌを除く）の削りかけ状祭具に関わる事例について、具体的で詳細な物象を集積することにより、習俗の分布や概要を把握すること。

(2) 上記の収集資料の分析を通して、木を削っただけの造形物が人々にとってなぜ神聖たりえたのか、削りかけを生み出した背景となる人々の精神性や世界観に、アプローチすること。

それは、精神文化というきわめて抽象的で言語化の困難な概念世界を、削りかけというモノを通して具体的に言語化する試みである。その精神文化とは削りかけを受け入れた日本列島の人々のそれであり、そのひとつの在り方を、具体的な形で指し示すことを目指す。

3. 研究の方法

(1) 関連資料の網羅的収集：

収集の対象としたのは、その用途や意味認識に関わらず削りかけ状の形態を持つあらゆる木製造形物に関わる事例で、①物そのものに関わる情報（形状や材質、製作道具や製法など）、および②そこに現われる具体的な行為に関わる情報（樹木の伐採から製作までの作法や儀礼、祀りの方法など）を可能な限り収集した。

客観的検証に足る量と質の事例を確保することを目的とし、二次資料により面的な情報を、フィールドワークにより、個別的でより詳細な一次資料の情報を収集した。二次資料は近世史料および近現代の自治体史、地誌、民俗報告書、映像・絵画資料などを対象とした。

(2) 収集資料の分析：

収集資料は必要な項目に関して表にデータ化し、分析を行なった。

収集過程においてとくに重要な視点として浮上したのが、削りかけの材となる樹木と

削りかけ習俗との密接な関わりであった。そこで、当初精神性という漠とした言葉で表現していた研究対象を、人間と自然（とくに樹木）との関係性において見られる思想や観念、世界観に絞った。削りかけ状造形物やその周辺にある具体的民俗事象の分析を通して、人々と樹木（あるいはさらに広く言って生態環境）との関係性が浮き彫りになることが判ってきたからである。

そこで、分析作業においては樹木をめぐる具体的事象を中心的対象に据え、削りかけを生み出す背景となった、人と樹木との関わり の在りかたを描くことを試みた。

具体的には樹種や伐採時期・方法・儀礼、樹木や生態に関する人々の知識（認識）、関連する伝説・禁忌、樹木の地域名称などを比較検証し、また生態学的な知見も援用することで、人々が樹木とどのような具体的、抽象的な関わりを結んでいたのか、またその中でどういった木が、削りかけに用いる「祭りの木」として選択されているのかを明らかにすることを試みた。

4. 研究成果

(1) 分析の基礎となる資料に関しては、二年の研究期間を通して一〇〇〇点以上の具体的事例を収集し、列島上の削りかけの分布や習俗の概要が明らかとなった（下図参照）。



【削りかけ分布図】

列島上の削りかけ習俗には、三つの大きな文化圏が認められる。もっとも広範なのが小正月周辺にみられるもので、東北地方から南九州まで分布し、その用途や意味認識において高い共通性を持つ。このほか、春彼岸に用いられる削りかけは東北地方に、山の神祭りに用いられる削りかけは紀伊山地に、小圏を作って分布する。

副次的な成果として挙げられるのが、自治体史や地誌などの、資料としての有用性を再確認したことである。本研究では、各都道府県の公立図書館や資料館に散在する関連資料を網羅的に収集してきた。これらの資料はフィールドワーク等によって得られる一次資料に比べて断片的ではあるものの、各地に膨大な蓄積があり、広範にわたる地域の習俗の概要を把握するためには、きわめて重要な基礎資料となった。こうした資料は、これまで網羅的に用いられることはほとんどなかったように見受けられるが、伝承の母体が不可逆的に縮小傾向にある現状において、今後の民俗学にとって非常に有用な資料となることが示されたといつてよい。

(2) 分析作業においては、とくに削りかけの材となる樹木に関わる具体的事象の分析を通して、①削りかけに用いる樹種を人々が厳密に選択していること、すなわち、神聖な用途に供する「祭りの木」を周囲の生態系の中から選び取り、聖性を付与していることを明らかにした。その上で、②人と樹木とのどのような具体的関係性の中で祭りの木が選択され、また、③どのような形で聖性が付与されているのかを検討した。

① 削りかけと樹木の相互規定

まず削りかけの材として選択される樹種の分析を通し、どういった形状・用途・名称の削りかけにどの樹種が用いられているかを具体的数値として示した。その結果、ヌルデ（ウルシ科）、ニワトコ（スイカズラ科）、ヤナギ類、ミズキ（ミズキ科）など特定のいくつかの樹種が、名称や用途に従って厳密に選択されていること、またその選択が日本列島の広い地域において共有されるものであることが明確となった。こうした樹種の高い共通性は、その背後に共通する樹木認識の体系を想定させるものである。

次に、伐採儀礼や時期、材の取り扱いや削りかけの造形などの分析を通し、樹木のもつ物質的あるいは生態的な特質が、削りかけの造形や儀礼の時期などに看過できない影響を与えていることを示した。また、樹木に対する日常的作法や慣習、認識が、そのまま削りかけ材を扱う場合にも反映されていること——すなわち人々が削りかけ材を無機質な素材としてではなく、生きた樹木として認識していること——も明らかとなった。

以上のことから、樹木という要素が削りかけ習俗の成り立ちに深く関与していることが明確となった。このことは、削りかけ習俗

を樹木信仰のひとつの形態として捉える必要性を示唆するものであろう。

② 樹木と人々との関わりの具体的側面

次に、どういった人／樹木との関わり中から削りかけが生み出されたのかを検討するため、植物生態学など関連諸分野の知見も摺りあわせながら、人／樹木の具体的関係性の在り方を探った。

その結果、材となる樹木群は先駆的性質を持ち、いわゆる里山など的人為的生態系——人の生活圏の傍らにあり人為的な介入によって成り立つ生態環境——を好む樹種が多いことが判明した。先駆種は大木にならず材も軽軟であるため、一般に有用性に乏しい。また、初期成長が早く、荒れた土地に適応して繁殖するため、有用木の成長を害する除去材としても認識される。

以上のように、削りかけの樹種群が人為的生態系を好むという事実は、生業をはじめとする人間の活動と生態的要因が複雑に絡まりあうなかで特定の樹木が選択され、また削りかけを祭るといふ精神活動が守られてきたことを示している。

それと同時に、人々がこれらの樹木をとくに削りかけ材として選択するための、合理的理由——身近にあり豊富に手に入ること、実生活においては有用性が乏しいこと——のあったことがわかる。

③ 樹木と人々との関わりの抽象的側面

一方で、削りかけの樹種群をめぐる様々な伝承や日常の用を禁ずるタブー、地域名称、利用をめぐる慣行などは、そうした合理的解釈だけでは捉えきれない人／樹木の関わりの在り方を示している。また、そうした様々な民俗事象は、人々が樹木に対して持つ聖性の認識が表面化したものでもあった。

一例を挙げれば、選択された樹種にどういった地域名称が与えられているのかを分析した結果、樹木に対する聖性の認識あるいは印象が、それぞれの名称に反映されていることが明らかとなった。たとえば、ヌルデを削りかけの材として用いる東北の一带では、聖徳太子の故事に由来するとされる「カツノキ」系の名称でこの木を呼ぶが、ヌルデを削りかけに用いない西日本では、「マケギ」「カブレ」など、負の印象を持つ名称が用いられていた。以上のことは、人々が名称を通して樹木の聖性を再認識していたこと、また名称が聖性の認識とその利用を伝承する媒体となったことを示すものであろう。

以上のように、本研究では削りかけという木製祭具の具体的事例を取りあげて検証してきたが、それは同時に、祭りの木に対する認識やその選定をめぐる人々の精神性——自然物をどのように認識し、特定の事物に聖性を付与するのか——へのアプローチであったともいえる。

研究ではその一端を明らかにしたが、二年間を通して収集し、データ化した膨大な事例からは、今後もより多様な自然と人間との関わり方の在り方の具体例を取り出すことができるはずである。

一例を挙げれば、自然（樹木）と利用権をめぐる問題がある。たとえば、削りかけなどの祝事に用いる樹木は山の所有者に関係なくどこからでも採取してよいなどの伝承が列島の広い範囲で聞かれ、近代的所有関係とは異なる関係性を自然に対して結んできたことが想定されている。これは近年、環境社会学などの分野で議論されている所有論やコモンズ論にも通底する問題であり、今後、こうした議論をふまえながら具体的事例を集積、分析することにより、人間／自然の関係性の在り方を、より深く理解することが可能となるものと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 今石みぎわ「小正月の樹とその選択—岩手・宮城のアワボとヌルデを中心に」
『東北民俗』43号 2009年6月刊行予定 (査読無)
- ② 今石みぎわ「アイヌの口承文芸に語られるイナウ—本州以南の削りかけとの比較の視点から」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』8号 pp.1-37 2008年 (査読有)
- ③ 今石みぎわ「小正月の祝い棒とそこのかたち—秋田の『火焚棒』の記録から—」
『真澄学』4号 pp.238-258 2008年 (査読無)
- ④ 今石みぎわ「箕づくりをめぐる技術と環境—とくにイタヤカエデにみる人と自然環境のかかわりについて」
『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』7号 pp. 1-38 (査読無)

[学会発表] (計 1 件)

- ① 今石みぎわ「削りかけ状造形物にみる人と樹木の関係性について」
日本民俗学会 第59回年会
2007年10月7日 於・大谷大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今石 みぎわ (IMAIISHI MIGIWA)
東北芸術工科大学・芸術工学研究科
特別研究員 (DC2)